

ときには、辛口

4

◆ふるさとと喪失

蓮池さんの帰郷

中大法学部三年に在学中だった蓮池薫さんは故郷柏崎の海岸で婚約者の奥土祐木子さんとともに突然拉致された。その後二十四年行方不明だった蓮池さんが北朝鮮から帰国した時の情景、それも羽田空港ではなく故郷のわが家へ帰りついたおりの情景をテレビで見るときは胸のあつくなる思いとともにひそかな羨望の念のようなものを覚えたのは私だけだろうか。

海岸での突然の拉致という想像を絶する不幸を背負った蓮池さんに対して羨望の念



松本道介
Michiuke Marumoto

を抱くなどとは、口が裂けても言えないことは重々承知しているつもりながら、他に言葉が見つからない。蓮池夫妻に地村夫妻そして曾我ひとみさんは日本中でもっとも不幸で不運な五人だが、それぞれ家族や近所の人々そして学校の同級生に熱く迎えられる姿を見て、五人のいずれもこれぞふるさとと言えるふるさとを持つ人であり、帰国への希望をまったく持てないまま二十余年を生きてなおも精神の安定を保ちえたのはあのように暖かなふるさとに育ったがゆえだと私には思われた。

北朝鮮の工作員による拉致が日本海沿岸の

あまりひとけのない海辺に集中していたせいで。帰国した五人は五人とも北陸のいなかの出身であり、そのようななかにこそ昔ながらの人情がまだ残っていることを思った。

都会は5人を迎えられたか

私は長らく東京に住んでいるせいもあってすべて東京を中心に考えるくせがあるので、用心しなければならぬが、今や都会ぐらしの人間のほとんどが自分の住んでいる土地にふるさとという感覚を持ってなくなっているのではないだろうか。あるいはもつと小さく言うと、自分の家の隣近所に向う三軒両隣といった親しみを持たなくなっているのではないだろうか。

とりわけ団地やマンションといった近代型（？）集合住宅はブライバシー優先にできていて、同じ階の隣近所とは顔を合わせないつくりになってしまった。おたがいに個人であり核家族であり、隣近所と親しくつきあうことはしにくいつくりになっている。したがって向う三軒両隣りといった感覚はもはや消えて行き、今かりに誰かが行方不明になったとしても、近所の人はほとんど気にもとめないだ

ろうし、かりに御当人が十数年ぶりに帰ってきたとしても、かつての近所の人々や学校友だちはほとんどどこかへ引越してしまっている。したがって帰りついた人間が味わうのは浦島太郎に似た思いだけではなからうか。

分岐点は、50年前

こうして都会を中心として今の日本人の多くが向う三軒両隣りを持たず、その延長としてのふるさとの感覚を知らない。言ってみれば誰もが一人一人で生きていような今の時代が私にはきわめておかしな時代に思われる。おかしな時代とはいつの時代とくらべておかしいかと問われれば、例えば私の場合なら五十年前の時代とくらべてと言いたい。

私は七十歳という年齢に近づいた教師であり、二十歳前後の学生とつきあうことを職業としていたせい、自分も学生であった丁度五十年前を思い出すことが多いし、また最近はずとめて当時を思い出すようになっている。そのため今の時代を五十年前とくらべることも多いが、その五十年前とくらべると今の時代はどう見てもおかしな時代である。

なぜ今の時代がおかしくして五十年前がま

なものか。五十年前がおかしくて今の方がまともではないのかと反論されるかもしれないが、私の言う五十年前には大昔からの歴史がくつついている。

例えば今非常に多くの人が乗っているクルマやバイクには太古以来五十年前までほとんど誰も乗っていなかった。皆自分の足で歩いていた。五十年前といえば、この頃に日本でテレビ放送が始まった。つまりそれ以前はテレビなど誰も持っていなかった。電話とて持っている家は非常に少なかった。

テレビも電話もなくてさぞ退屈だったでしょうと同情されるが、少しも退屈ではなかった。まずは家族同士がよく話した。兄弟も多かったから閉じこもるような自室もなく、よく話しよく喧嘩もした。隣近所ともよく話した。子供同士も隣近所で遊ぶのが常だった。

人間生活の中心は家庭でありその外側に隣近所があり、そのまた外側に町や村、そして市や県さらには日本という国があった。さらに輪がひろがって海の彼方に朝鮮あり台湾あり中国ありそのまた遠くに世界を思い浮かべたものだが、これはきわめて健全でまともな世界像だったと思われる。

しかし今はどうだろう。家庭のなかでもまず一人一室。その一室はテレビ、パソコン、ケータイがあつて瞬時に世界全体とつながることができると言ってもその「世界はすべて情報として映像として存在しているだけである。このおびただしい情報や映像と個人の一室とのあいだに家族とか隣近所とかいったものはまったく存在しない。

家族とも疎遠で隣人とも無縁であろうと、コンビニ、ATMその他すべて人との会話なしにやっつけていける世の中だからにも困ることではない。昔だったらたいの人間がこんな生活には耐えられない。おれはさびしい、さびしい、なんて孤独なんだなどと思つたにちがいないが、今は違うらしい。孤独どころかこのような生活こそが快適なんだと思う人も多いらしい。

しかしそんな人のなかから、人とうまくつきあえない、人の目を見て話ができない、人前でうまく話ができない、したがって就職の会社面接などとても行けないなどという学生も出てくる。どう見ても今の社会はおかしいと私は思うのである。

(文学部教授)